

大原と文学 諸行無常の鐘（寂光院）

小さな木製の塔にかかる青銅の鐘は 1752 年に鑄造され、毎日午後 5 時に 10 回鳴らされます。近くの本堂で 2000 年に起きた火事でも、損傷を免れました。

塔から吊るされた長い木材は鐘を打つために使用され、龍の頭の形に鍛造されたフックで梁から吊るされています。

現在の鐘は、壇ノ浦の戦いで平氏が敗北してから約 600 年後に造られましたが、以前の鐘は、平氏と源氏が日本の主導権を争った源平合戦（1180-1185）の叙事詩である「平家物語」で言及されています。

平家一族の敗北後、落人達の行動を図式化した密書とされる「**The Initiates' Book**」では、1186 年春、後白河上皇が、寂光院に隠棲する建礼門院のもとを訪れる様子が描かれています。物語では、院は十七歳の時の建礼門院を養子にむかえ、二人は人間の不幸や苦しみ、再生などの仏教の概念について話します。